HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の日韓対照研究 : ヘッジとポライトネスの観点から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	李, 鳳
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第11427号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55674
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Bong_Lee_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：李　鳳

学位論文題名
「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の日韓対照研究
―ヘッジとポライトネスの観点から―

本研究は、日本語の「思考」、「判断」、「認識」を表す動詞とされている「思う」と、それに対応する韓国語の動詞「생각하다(sayngkakhata)」の比較を行い、日本語学、韓国語学、日韓対照研究におけるこれまでの成果を踏まえて「思う」と「생각하다　(sayngkakhata)」の用法を、モダリティ、ヘッジ、発話行為理論、ポライトネス理論という複数の概念と理論的枠組みを用いて分析し、統合することによってその類似性と相違を明らかにすることを目的とする。以下、本研究の内容を章ごとに要約する。

第１章では、本研究の目的、理論的枠組み及び、構成について説明する。

第２章では、「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の先行研究を概観した後で、本研究の枠組みでどのように先行研究を統合して、「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の類似性と相違を明らかにするか、その概要を説明する。

第３章では、まず、「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の動詞として用法の比較を行い、この２つの動詞が統語的・意味的特質を共有しており、違いがないことを論じる。

第４章では、「思う」のモーダルな用法に焦点を当てて、Coates(1983)の「認識的モダリティ不可侵性の原理」を用いて、「思う」が認識的モダリティとしての性質を持つことを論じる。その後で、同じ方法で、韓国語学、日韓対照研究ではこれまで論じられていなかったが、「생각하다(sayngkakhata)」も、「思う」と同様に認識的モダリティとしての性質を持つことを示す。

第５章では、認識的モダリティの性質を持つ「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」のモーダルな用法は、他の認識的モダリティにはない性質を持つことを指摘し、この性質は、「思う」と「생각하다　(sayngkakhata)」がヘッジとして機能しているためであることを示す。ヘッジはItani(1996)他が論じているように、命題に対する限られた確信を伝え、発語内の力を弱める働きがあることを説明した上で、まず、認識的モダリティとしての「思う」が発語内の力を修正するヘッジとして機能していることを示す。その後で、「생각하다(sayngkakhata)」も同様に、発語内の力を弱めるヘッジとしての機能していることを明らかにする。

第6章では、ヘッジとしての「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」が、どのような文と共起するのかをSearle(1979)の発話行為理論における発語内行為の観点から文の性質を分析することによって明らかにする。この章では、話者(S)と聴者(H)の間に標準的な人間関係を想定して分析し、Searle(1979)の発語内行為の5分類のうち、「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」は、断定型の発語内行為と共起するという共通点を持っているが、指示型と拘束型の発語内行為とは、「思う」のみが共起し、「생각하다(sayngkakhata)」は共起しないという相違が見られることを明らかにする。しかし、何故、「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」にこのような類似性と相違が存在しているのかという問題が残る。7章と8章でこの類似性と相違の性質をポライトネス理論の観点から説明する。

第7章では、まず、Brown & Levinson(1978/1987)（以下、B&L(1978/1987)と表記する）のポライトネス理論と、ヘッジとポライトネスとの関係について説明する。B&L（1978/1987)は、D(話者(S)と聴者(H)との社会的距離)、P(聴者(H)の話者(S)に対する相対的力)、Rx(特定の文化においてある行為(x)が相手にかける負荷度)という3つの要因を取り入れて「フェイス侵害度見積もりの公式」(Wx＝D(S,H)＋P(H,S)＋Rx）を提案する。そして、xという行為が相手にかける負荷度Rの重みづけは、文化によって異なっており、文化差が重要な変数の一つとして組み込まれるため、ポライトネスの表現方法も文化によって違ってくると指摘している。このため、ポライトネスは、文化価値を取り入れて日本語と韓国語の対照研究を行うことを可能にする概念であると考えられることを説明し、最後に、ヘッジが主としてネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つと位置付けられることを説明する。

第8章では、これまでの日本語と韓国語のポライトネス研究の発展を概観し、本研究をポライトネスの日韓対照研究の中に位置づける。その後、ヘッジとして機能している「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」との間にある類似性と相違を、ポライトネス理論を用いて次のように分析し、説明する。

まず、B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積もりの公式」における変数を用いて、Pはすべての状況で影響がないものと想定した上で、Dは3段階、Rは2段階に分けて、発語内行為ごとに6つの例を使って分析を行う。その結果、6章で考察した、話者(S)と聴者(H)の間に標準的な人間関係を想定した場合より、「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の用法の間にさらに細かい類似性と相違があることが明らかになることを示す。すなわち、「思う」は、断定型と拘束型の発語内の力を持つ文に対しては、Rの大小、Dの遠近によらず、すべての場合においてヘッジとして用いられるが、指示型の発語内の力を持つ文に対しては、「思う」は、相手にかける負荷度Rが大きくてDが遠い人間関係と、Rが大きくてDが中間の人間関係と、Rが小さくてDが遠い人間関係においてのみ、ヘッジとして用いられることを明らかにする。

一方、「생각하다(sayngkakhata)」は、断定型の発語内の力を持つ文に対しては、相手にかける負荷度Rが大きくてDが遠い人間関係と、Rが小さくてDが遠い人間関係の場合に限り、ヘッジとして用いられることを示す。つまり、「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」は、断定型の発語内の力を持つ文に対しては、相手に

かける負荷度Rが大きくてDが遠い人間関係と、Rが小さくてDが遠い人間関係の2つの場合に限り、共にヘッジとして用いられることを明らかにする。さらに、「생각하다　(sayngkakhata)」は、指示型と拘束型の発語内の力を持つ文に対しては、Dの遠近、Rの大小によらず、ヘッジとして用いられないことを示す。

最後に、第9章では、各章で得られた「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の特徴をまとめた上で、その研究の流れを簡単に要約し、今後の研究の展望を述べる。